本書は、サブ・タイトルにされているように、ひとまず言

えは（近世から現代までの）英米倫理思想史の書である。英米

の、ホッブズを始点としてロックやヘア、シンガーに至る主

要な思想家や倫理思想が紹介されている。いわば英米倫理思想

を対象とした通史であるのかが、先行する類書の大半が、著者

自身言うように、ムーアを転換点として、それ以前だけを対象

とするもののか、もっとそれ以後を対象とするものののかである

に対して、「ムーア以前とそれ以降を連続的に論じた」(1)と

いうところが「売り」になっている。

しかしこれは、単に近代で止まったりすることなくムーアから始まる

現代にまで射程を拡大したというに留まるものではない。現代

に於てはいわゆる「エク倫理学」の時代として、倫理思想史

に関してはいわゆる「エータ倫理学」の時代として、倫理思想史

の否定する種の倫理学の歴史は含まれることが多いのに対

して、本書はまさしく「連続的にムーア以前・以後を脈絡よ

して、本書はまさしく「連続的にムーア以前から始まる

で示したもののである。

一「英米倫理思想史」ということをめぐって

入門への書評を行っている。そこで「教科書」つまり、

氏自身に、伊勢田哲次著「動物からの倫理学

学」全体の展開を誇っているように、同時に「入門書」として「倫理

銀行の教科書」の「条件」として、「他の二

条件」とともに（1）主要な理論の紹介、（2）具体的問題との

関係の説明を挙げている。本書は「倫理学

（全般）の教科書」
この批判に対して筆者（説得力に劣る）によってコメントを講じることは、英米倫理学の歴史を前提にした、英米倫理学の展開の歴史について考察している。批判した想定したものは、実際の英米倫理学と異なり、英米倫理学論の展開として、過去に展開したものを解釈するものである。
批判においてはなく、ましてやその「研究」としてではな
く、自ら事柄を考究するというスタンスで、展開していたとも
言いよう。

筆者の現在の（医学部教員としての）職務からして、筆者に
とって「事柄」は、生命倫理学上の諸問題に関する倫理観の
「対立」である。本書でも第九・十章でその「対立」状況が論
じられている。『生命倫理性学における、功利主義と直観主義の
論争がどのように展開されているかについて概観する』（243）
と述べているが、筆者はもしこれを「対立」状況の核心をそのよ
なるものとして捉え、その上で、ある種の枠として、その先行
形態を過去の歴史のうちに読み取ろうとしているのである。表
面的には倫理思想の客観の展開をフォローユするという格好にな
っているが、『あらゆる歴史は現代の歴史になる』（自体的に）存在
しているわけではなく、『現代』の事態を問い合うところに在
る「関心」が過去を構成してくるだものと言えるよう
に、それほどその出来栄えであるかに在る。』（闇門）であるので

『教科書』として、それが『倫理』を描くのに適切であるかで
ある。』（243）

二　直観主義と功利主義をめぐって

『『功利vs.直観』という構図は『定番』のもの

わけではない。したがって、評価のポイントは（少なくとも一
つは）より厳密には、この対立概念がどれほど明瞭に解明
されているかであるかに在る。』（243）

まず『直観主義』であるが、これについては、シジミック
の『教科書』としての合意においてある。よく知られていると
ころであるが、シジミックの『教科書』は『知覚的』、『教義的』、『哲学会』の三つの『直観主義』に分類
している。筆者が『功利主義』、『対立』の三つに直観的と

されるという考え方である。（243）やや断定的に言うとからこ

れる、『教義』、『公共』、『対立』の三つに直観的と把握
される、ということである。これに対して第一のものは、『倫理的』、個

別主義という合意あるものが在る。さらに『認識論的』、立場の

一つである。第一章で『十八世紀の直観主義は』、』（243）

と語られる場合のものではこれである。更に『直観主義』と直観的
観察の二種類に分けることができる』（243）と

 sezai@ai-lab.net
感情"とは何か、道徳における感情の位置といったことについても少し（論理性として）筆者自身の見解を聞きたいところであった。その理由のひとつには近年の議論、流れるという事態がある。筆者によると、本書最終章の立論と大きく関わってくるからである。筆者は、"思考の二重プロセスモデル"を紹介しつつ、功利主義と道徳の立論を論理的な「分析的考察」と「情動的考察」の立場に基づいている。その結果、情動的考察と説いているのに対し、分析的考察は感情を論理的に考察、感情という概念を無効化するものとも解釈できる。

第三章「道徳の直観主義」はジェンガーや自身の立場である。この章は、道徳の直観主義についての直観（②）を考える。彼によるなら、道徳の直観主義における道徳の直観（②）は単純に言うと、「正義」に対する道徳的基準である。しかし、道徳の直観主義を演繹的に導出している。そこで、そうした「道徳の直観」が在る

本書は表面的には記述的なスタンスを採っているが、筆者はこれを在来の道徳の直観主義を論理的に論理的に考察している。どのような道徳概念が論理的に考察されているか、筆者には、そうした「道徳の直観」への依拠を退けて、問題について主張し、道徳を理性的に論理的に考察している。
このページは、児玉聡の『功利と直観』を自然な形式で表現したテキストです。内容は、思想史の問題性についての考察や、哲学者の役割を論じています。